

實語教繪抄

T1A0
22
(TA73)

實語教繪抄序



以^いし^し子^こ道^{だう}ある人^{ひと}も人^{ひと}は贈^{あづかる}る^{こと}を以^{もつ}て言^{ことば}を甘^{あま}情^{なさけ}
 乃^{すなは}表^{あらわ}也^{なり}孔子^{こうし}曰^い無^な情^{じやう}者^{もの}不^あ得^え盡^{つく}其^{その}辭^{ことば}於^お我^{われ}金^{かね}言^{ことば}
 塵^{ちん}蟬^{せん}を^を後^{のち}者^{もの}の草^{くさ}乃^{すなは}正^{ただ}死^し死^し人^{ひと}と^と愛^{あい}し^{こと}必^{かならず}捕^{とら}ま^すか
 隨^{したが}て盡^{つく}る^{こと}を^を外^{の外}坊^{ぼう}間^{かん}流^{りゅう}布^ふ乃^{すなは}冊^{さつ}子^しあり^{こと}を^を喜^{よろこ}ぶ^{こと}も
 志^しを^を其^{その}終^{つひ}を^を持^もつ^{こと}む^{こと}字^じを^を終^{つひ}る^{こと}ま^すの^の二^{ふた}者^{もの}を^を終^{つひ}る^{こと}も^も京^{きやう}は
 浮^う屠^との^のふ^ふに^に就^つむ^{こと}れ^{こと}ら^ら亦^{また}終^{つひ}る^{こと}も^も禪^{ぜん}益^{えき}あり^{こと}持^も
 ざる^{こと}も^も長^{ちやう}門^{もん}本^{ほん}平^{へい}家^かの^の終^{つひ}る^{こと}も^もあ^あの^の筆^{ひつ}を^を裁^きり^{こと}
 け^ける^{こと}も^もあ^あの^の筆^{ひつ}を^を裁^きり^{こと}け^ける^{こと}も^もあ^あの^の筆^{ひつ}を^を裁^きり^{こと}

東の口氣くわいあはれあはれの聲こゑきこゆるきこゆる何なになるなる新あらたし
よくよくおれおれをを頭あたまににくくりりししててののこゝろこゝろをを其その義ぎをを味あじひひ
りりたた軍ぐんははるる於おここにに画え工くはは爲なすす玉たま山さん子このの御ご思しひひ
解とけけしし備ひへへたた後あとをを出だしし書かきをを家いえ後あとににはは
提てい徑けいをを用もちひひととななりり又また慈あはれみみををああははれれにに解とけけ
併ひとにに玉たま山さんのの邊へににおおかかししたた於おここにに戲あそぶぶ者ものもも
形かたちをを乃すなはちちににああららわわるる人ひとはは必かならずししてて指さしささ
指さしささししのの後あとににああららわわるる玉たま山さん既すでにに後あとににはは
よよのの書かき辭ことば亦また指さしささししののゆゆゑゑににおおかかししたた於おここにに新あらたし

新あらたししままるるゆゆにに有あるる浪なみのの森もり本もとをを助たすけけりり以もつてて
者もの只ただ願ねがふふかかをを序しりをを余あまにに傳たづねねししてて其その志こころざしをを余あまにに賞あづからら
玉たま山さんのの名なををああららわわるる玉たま山さん河か隔かぎ絶たつつつててままをを相あひ
見みざるざるをを選えらびびししてて况いはににおおかかししたた於おここにに新あらたしし
稍さう久ひさしし彼かれををおおかかししたたゆゆゑゑにに折ひ折ひ移うつりりしし由よしななららばば
似にかかるるももままののちちををああららわわるる多おほ言ことばをを氣き後あとのの害がいにに
美み言ことば必かならずししてて信まことににああららわわるるゆゆゑゑにに何なにももののゆゆゑゑにに
善よきよ事ことををおおかかししたたゆゆゑゑにに其その熱あつ心こころをを讀よみよみよ
おおかかししたたゆゆゑゑにに葉はををおおかかししたたゆゆゑゑにに茶ちや葉は乃すなはちち

室よりかきとぐりて筆を以て書し心
 文正九年壬申初冬十九日書於版
 名著作也

江戸 曲亭蟬史



け実後文正の弘法大師の像也。
 大伴の撰易多房致麻風伯の令也。
 父の佐伯の直氏母の阿刀氏なり。
 あるお母のまにまにうり傳へて
 ありてうりよ入るとおぼして
 衛り。格内よありて
 十二月八日十九代
 光仁天皇の宝龜五年
 うちまへ十八日して大寺のにおり。
 仏に似てありてはわにありて
 延暦十三年。東大寺の撰へてありて
 眞是戒と云ふと空海とありたむ。
 あつては仏にありてありてありて
 十二経の我んようありてありてありて
 法とありてありてありてありてありて
 傳へてありてありてありてありてありて



大毘盧遮那神變加持のりふとまの秘要なりつるを法華經のありは
 かりけるふと和品言市販久米の通達してけりるをけりる文法さるるや
 入唐して青龍寺の惠果阿闍梨と習して彼法の奥法を秘法とて入唐
 元年十月は泊期して傳來の密法とひるむ弘仁七年は紀伊の西宮山とて
 金剛峯寺と建立して仁明天皇の御宇承和二年三月廿二日高僧の
 小入定せんそのうち延和二年に弘法大師とあらうとて宣下して高僧の
 末代の人と化せんといふ傳化の二教とかんて能く。

○ 實徳の二名の法は從地涌出品に我今授實徳法者一心に信せよ
 言不虛發微妙才と云と

○ 實徳の二名の法は從地涌出品に我今授實徳法者一心に信せよ
 言不虛發微妙才と云と

繪抄

山高故不貴
 以有樹為貴
 人肥故不美
 以有智為美
 富是下生財



山高故不貴
 以有樹為貴
 人肥故不美
 以有智為美
 富是下生財



かるいもの一せむの
 財よりが滅されが
 共あるものこの世の
 終るは滅し消えぬ
 こゝとを智の是る代
 の財として智ある世の
 たうらして身守るる
 人のためもたうらしかう其人の
 強しこゝの善物まほしく
 強し至き入はしてけり
 そこの母とて
 佛のりびと
 かり玉不磨
 玉光なるは
 ひこるかうま
 とていふの
 ていふの

身滅品共滅
 智是身代財
 余終身随ひ
 玉不磨玉光
 玉光なるは
 人の子を智



かるいもの一せむの
 財よりが滅されが
 共あるものこの世の
 終るは滅し消えぬ
 こゝとを智の是る代
 の財として智ある世の
 たうらして身守るる
 人のためもたうらしかう其人の
 強しこゝの善物まほしく
 強し至き入はしてけり
 そこの母とて
 佛のりびと
 かり玉不磨
 玉光なるは
 ひこるかうま
 とていふの
 ていふの

身内財有朽
 身内才無朽
 隆積千両金
 不如一日言
 足才常不金

倉の内の財ハ有朽
 一の腐に入るるは
 老たるにまれば
 残るをえぬや
 才智あり。財内も
 朽朽として。智も
 老るや。ゆきと
 降積す。金も
 老るや。ゆきと
 降積す。金も
 老るや。ゆきと
 降積す。金も

慈悲為足才
 才智為財物
 心神如暗
 老後泣恨毎
 叔漢書勿倦
 除眠通夜誦

財物永不朽
 比大目之妻
 幼時不勸学
 尚吾有不益
 学又勿怠时
 其机终日好

慈悲の足才
 才智の財物
 心神の如暗
 老後の泣恨
 叔漢書の勿倦
 除眠通夜の誦



人の群する其群
 老たるにまれば
 残るをえぬや
 才智あり。財内も
 朽朽として。智も
 老るや。ゆきと
 降積す。金も
 老るや。ゆきと
 降積す。金も

誰會師不学
 泣如向市人
 隨智漢不漢
 只如計漢財
 君子老智者
 小人老福人



朝、く晩、く...
 月おの後の
 ひろく...
 市人の市人の

墮入富貴家
 為財人志
 如霜下花
 淫出賤門
 為有智人志
 宛如泥中蓮



父母如天地の如く
 師君如日月の如く
 親族辭如葉の如く
 妻妾如瓦の如く
 父母孝朝夕の如く

父母如天地
 師君如日月
 親族辭如葉
 妻妾如瓦
 父母孝朝夕

已之盡礼...
 礼之...
 人而...
 小生...
 老...
 三...
 戒...
 惠...
 一...
 視...



師君仕...
 交友...
 已足...
 已才...
 人而...
 不異...

法と修...
 法を修...
 何の法...
 受...
 七...
 一...
 名...
 の...
 仏...
 どの...
 老...
 研...
 求...
 なく...

人而...
 不交...
 不...
 八...
 言...
 敬...

不異...
 何...
 難...
 十...
 放...
 光...



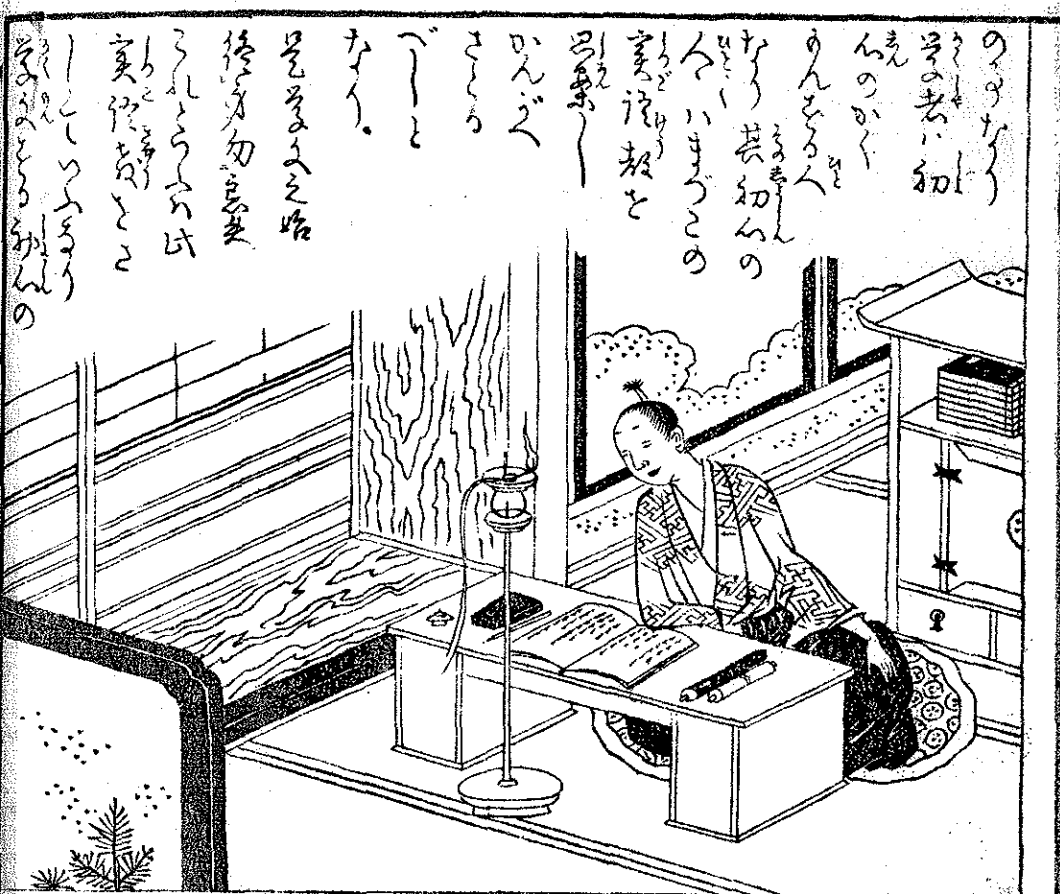
若菜のふさふさした田舎のふさふさしたけいさくとのれ徳者よ。正一 正思惟見の...
 正思惟 一心念がく。三 正語 喜後せぬも。四 正業の戒受の... 五 正念の...
 戒受の... 七 正念の... 八 正定... 九 正身... 十 正行...
 十一 正行... 十二 正行... 十三 正行... 十四 正行... 十五 正行...
 十六 正行... 十七 正行... 十八 正行... 十九 正行... 二十 正行...
 二十一 正行... 二十二 正行... 二十三 正行... 二十四 正行... 二十五 正行...
 二十六 正行... 二十七 正行... 二十八 正行... 二十九 正行... 三十 正行...
 三十一 正行... 三十二 正行... 三十三 正行... 三十四 正行... 三十五 正行...
 三十六 正行... 三十七 正行... 三十八 正行... 三十九 正行... 四十 正行...
 四十一 正行... 四十二 正行... 四十三 正行... 四十四 正行... 四十五 正行...
 四十六 正行... 四十七 正行... 四十八 正行... 四十九 正行... 五十 正行...
 五十一 正行... 五十二 正行... 五十三 正行... 五十四 正行... 五十五 正行...
 五十六 正行... 五十七 正行... 五十八 正行... 五十九 正行... 六十 正行...
 六十一 正行... 六十二 正行... 六十三 正行... 六十四 正行... 六十五 正行...
 六十六 正行... 六十七 正行... 六十八 正行... 六十九 正行... 七十 正行...
 七十一 正行... 七十二 正行... 七十三 正行... 七十四 正行... 七十五 正行...
 七十六 正行... 七十七 正行... 七十八 正行... 七十九 正行... 八十 正行...
 八十一 正行... 八十二 正行... 八十三 正行... 八十四 正行... 八十五 正行...
 八十六 正行... 八十七 正行... 八十八 正行... 八十九 正行... 九十 正行...
 九十一 正行... 九十二 正行... 九十三 正行... 九十四 正行... 九十五 正行...
 九十六 正行... 九十七 正行... 九十八 正行... 九十九 正行... 一百 正行...
 一百一十 正行... 一百一十一 正行... 一百一十二 正行... 一百一十三 正行... 一百一十四 正行...
 一百一十五 正行... 一百一十六 正行... 一百一十七 正行... 一百一十八 正行... 一百一十九 正行...
 一百二十 正行... 一百二十一 正行... 一百二十二 正行... 一百二十三 正行... 一百二十四 正行...
 一百二十五 正行... 一百二十六 正行... 一百二十七 正行... 一百二十八 正行... 一百二十九 正行...
 一百三十 正行... 一百三十一 正行... 一百三十二 正行... 一百三十三 正行... 一百三十四 正行...
 一百三十五 正行... 一百三十六 正行... 一百三十七 正行... 一百三十八 正行... 一百三十九 正行...
 一百四十 正行... 一百四十一 正行... 一百四十二 正行... 一百四十三 正行... 一百四十四 正行...
 一百四十五 正行... 一百四十六 正行... 一百四十七 正行... 一百四十八 正行... 一百四十九 正行...
 一百五十 正行... 一百五十一 正行... 一百五十二 正行... 一百五十三 正行... 一百五十四 正行...
 一百五十五 正行... 一百五十六 正行... 一百五十七 正行... 一百五十八 正行... 一百五十九 正行...
 一百六十 正行... 一百六十一 正行... 一百六十二 正行... 一百六十三 正行... 一百六十四 正行...
 一百六十五 正行... 一百六十六 正行... 一百六十七 正行... 一百六十八 正行... 一百六十九 正行...
 一百七十 正行... 一百七十一 正行... 一百七十二 正行... 一百七十三 正行... 一百七十四 正行...
 一百七十五 正行... 一百七十六 正行... 一百七十七 正行... 一百七十八 正行... 一百七十九 正行...
 一百八十 正行... 一百八十一 正行... 一百八十二 正行... 一百八十三 正行... 一百八十四 正行...
 一百八十五 正行... 一百八十六 正行... 一百八十七 正行... 一百八十八 正行... 一百八十九 正行...
 一百九十 正行... 一百九十一 正行... 一百九十二 正行... 一百九十三 正行... 一百九十四 正行...
 一百九十五 正行... 一百九十六 正行... 一百九十七 正行... 一百九十八 正行... 一百九十九 正行...
 二百 正行...

我教他人志
 他人亦教我
 已教人親志
 人亦教已親
 欲求己身者
 定令達化人
 見他人之慈
 則身亦可慈
 同化人之喜

我教他人志
 他人亦教我
 已教人親志
 人亦教已親
 欲求己身者
 定令達化人
 見他人之慈
 則身亦可慈
 同化人之喜



夫の書は...
 中...
 ...
 ...
 ...



のりか...
 ...
 ...
 ...

先可来世書
 先可来世書
 先可来世書
 先可来世書
 先可来世書

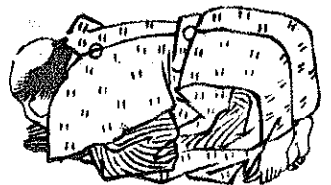
音学...
 ...
 ...
 ...

童子教はもとより、腐の
 白樂天の成都の文珠
 堂として世もろくはなす
 といふ大珠善庵の
 云々云々と童のいふ
 心くやけと童の
 故といふはけりそ、吾朝
 安並和尚も且越西系なる
 麴屋の思のたきよけ書状
 考へて一考一考と
 考へて一考一考と
 考へて一考一考と
 考へて一考一考と



ゆ? たつふふふふふふふふ
 考へて一考一考と
 考へて一考一考と
 考へて一考一考と

夫夫人の居る所、其處を
 父母に見し位、ある人として我
 といふ人といふ人として我
 といふ人といふ人として我
 といふ人といふ人として我
 といふ人といふ人として我
 といふ人といふ人として我
 といふ人といふ人として我
 といふ人といふ人として我



童子教
 其貴人を知る
 頭高不得立
 遇道踏踏色
 有る事致取
 ある胸向

三宮の仏像の三所なる。神明と一切の諸君。
 心通秘めたる者なり。天照大神の御心。
 懸して非と非を辨る。

非おとふ。二宮の三宮の
 事なり。人同く一礼
 ことある。人同く一礼
 高下ある。あれが。
 ことくの。ことくの。
 夫人も。夫人も。
 一礼の。一礼の。
 か。か。



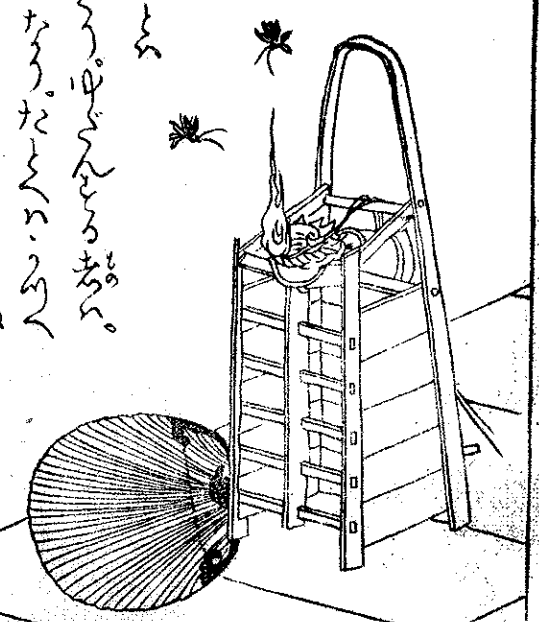
慎不取方志
 不同者ふ善
 有信者謹固
 三寶有之礼
 神明被其礼
 人乃成一體

三宮の仏像の三所なる。神明と一切の諸君。
 心通秘めたる者なり。天照大神の御心。
 懸して非と非を辨る。



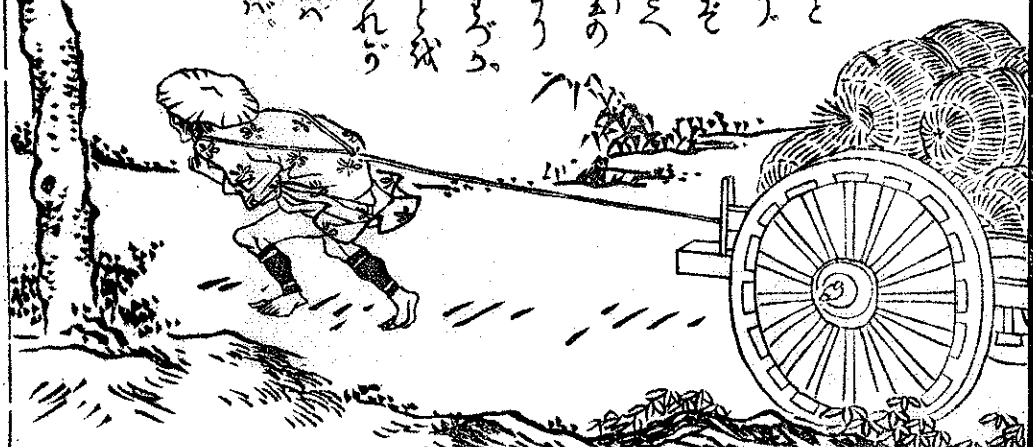
師君丁頂戴
 過暮時則慎
 過社時則下
 向堂塔之前
 不可行不淨
 白聖教之上

惟多食食多
 合得たるをくたつた人の心
 たる様のおまよひ
 勇者必有危
 往志又先過
 夏虫入火
 勇者必有危
 往志又先過
 夏虫入火



疲極如貪夢
 勇者必有危
 夏虫入火
 往志又先過
 春鳥如遊林
 人耳志付塵

人眼老雙天
 人眼志雙天
 春鳥如遊林
 人耳志付塵
 人眼志雙天
 春鳥如遊林
 人耳志付塵



密る勿後云
 人眼志雙天
 後る勿れ用
 車以三寸糖
 遊り千里路
 人心三寸舌

此の如くは...
 此の如くは...
 此の如くは...
 此の如くは...
 此の如くは...
 此の如くは...
 此の如くは...
 此の如くは...
 此の如くは...
 此の如くは...

破損也人身
 古是禍之根
 終身取善事

此の如くは...
 此の如くは...
 此の如くは...
 此の如くは...
 此の如くは...
 此の如くは...
 此の如くは...
 此の如くは...
 此の如くは...
 此の如くは...



此是禍之門
 使如鼻者
 己言一出志
 罵道不返舌
 白毫珠可磨
 惡云玉粒磨



禍福志在門
 唯人有取捨
 天作災之避
 自作災難逃
 夫積善之家
 不有餘慶矣

疎まのまかひであつて其
 故に頼りやうもるやうに
 又思ふこのいふまゝに
 善のまかひ
 まて國軍が
 ありは
 ちてみ
 後ふま
 ほつれん
 ぬまの



又好悪を
 不有餘殃矣
 人而有陰德
 不有陽報矣
 人而有法以
 免有照名矣

人而有陰德
 人而有法以
 免有照名矣
 信力堅固門
 災禍雲霧起
 念力強盛家
 福祐月増光
 公不月如面
 譬如水隨器



人而有陰德
 人而有法以
 免有照名矣
 信力堅固門
 災禍雲霧起
 念力強盛家
 福祐月増光
 公不月如面
 譬如水隨器

不換他人の馬

不換他人の馬

不換他人の馬

不換他人の馬

不換他人の馬

不換他人の馬

不換他人の馬

不換他人の馬

不換他人の馬

不換他人の馬

不換他人の馬

不換他人の馬

不換他人の馬

不換他人の馬

不換他人の馬

不換他人の馬

不換他人の馬

不換他人の馬



不換他人の馬

不換他人の馬

不換他人の馬

不換他人の馬

不換他人の馬

不換他人の馬

善走る名馬

人志死苗名

治園土質宜

君子不養人

入境と同禁

入郷と同郷

籠極与禍多

虎志死苗皮

勿侮穢寡矣

則氏作其美

入園と同生

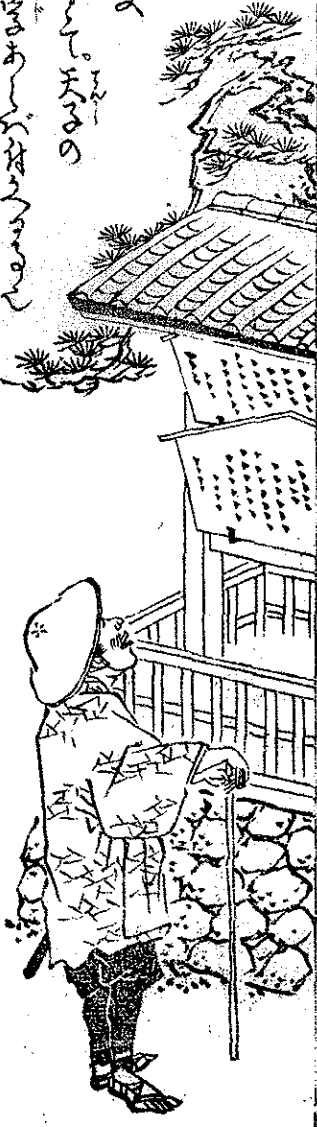
入俗と同俗

善走る名馬
人志死苗名
治園土質宜
君子不養人
入境と同禁
入郷と同郷

籠極与禍多
虎志死苗皮
勿侮穢寡矣
則氏作其美
入園と同生
入俗と同俗

不換他人の馬
不換他人の馬
不換他人の馬
不換他人の馬
不換他人の馬
不換他人の馬

夫の如き松律として天の
 御名を合はせしむる事
 三つありて一は
 神代卷の御事
 二は神代卷の御事
 三は神代卷の御事
 此の如き松律として天の
 御名を合はせしむる事
 三つありて一は
 神代卷の御事
 二は神代卷の御事
 三は神代卷の御事
 此の如き松律として天の
 御名を合はせしむる事
 三つありて一は
 神代卷の御事
 二は神代卷の御事
 三は神代卷の御事



夫の如き松律として天の
 御名を合はせしむる事
 三つありて一は
 神代卷の御事
 二は神代卷の御事
 三は神代卷の御事

入口之御律
 為教主人也

夫の如き松律として天の
 御名を合はせしむる事
 三つありて一は
 神代卷の御事
 二は神代卷の御事
 三は神代卷の御事

夫の如き松律として天の
 御名を合はせしむる事
 三つありて一は
 神代卷の御事
 二は神代卷の御事
 三は神代卷の御事

似用針指地
 必用爰親天
 亦て之を爰
 志志之遠義
 夫の如き松律として天の
 御名を合はせしむる事
 三つありて一は
 神代卷の御事
 二は神代卷の御事
 三は神代卷の御事

佛刹弟子志
此刹弟子志
佛刹弟子志
佛刹弟子志
佛刹弟子志
佛刹弟子志
佛刹弟子志
佛刹弟子志
佛刹弟子志
佛刹弟子志

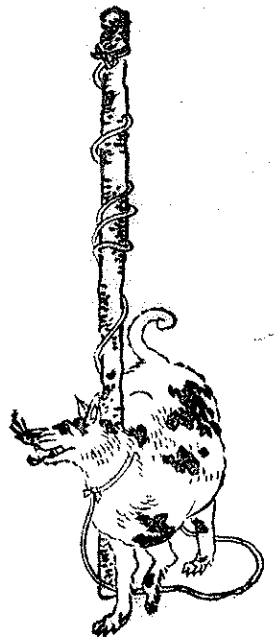
佛不剃弟子
佛呵責弟子
蓄惡弟子志
糧食弟子志
不順教弟子
不和志撒寬

是名為破戒
是名為持戒
師弟子惡地獄
師弟子至仏果
王子道又母
成起欲加害

地獄
春
よ

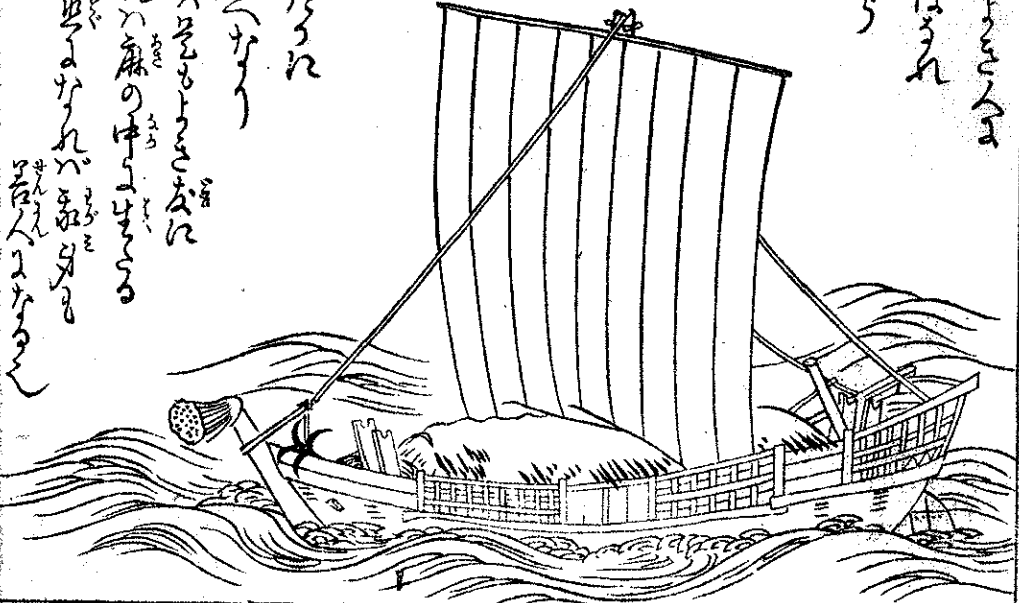
佛不剃弟子
佛呵責弟子
蓄惡弟子志
糧食弟子志
不順教弟子
不和志撒寬

緣大如迴柱



不和志撒寬
佛不剃弟子
佛呵責弟子
蓄惡弟子志
糧食弟子志
不順教弟子
不和志撒寬
佛不剃弟子
佛呵責弟子
蓄惡弟子志
糧食弟子志
不順教弟子
不和志撒寬

到者人亦離
 されたりてはなれ
 ども居るまじり
 若人よかり
 公たのしみ
 て身も
 安んじ
 その
 自中
 うちを
 大和
 たるがごとくゆたかに
 なること入たるか
 随順若友志
 ちかひまじりぬ麻の中
 よしこのごとく
 若人よかり



到者人亦離
 大和如浮海
 随順若友者
 如夜中道坐
 親を悪友志
 如夜中前曲

親道悉たまふ
 ちかひまじりぬ
 麻の中
 よしこのごとく
 若人よかり
 ちかひまじりぬ
 麻の中
 よしこのごとく
 若人よかり
 ちかひまじりぬ
 麻の中
 よしこのごとく
 若人よかり



親道悉たまふ
 習戒之業
 根性深
 好句致字佳
 一日学一字
 三百六十字

我根性のおうらやまし

そのおれはかちぞ

たとひ

又きえるのよ

そなたうらやましとて

他人と作して

おのれとつらばらば

一字のあ千金と

ひくは不韋と

いふ人呂氏春秋と

云書と流るるて

千金とそとて市と町中

一粟のちもあしむるを

たれしたるは人々いひ

あふんとて千金と

一粟のちもあしむるを

一粟のちもあしむるを



一字のあ千金

一粟のちもあしむる

一日師不昧

况救急師乎

師志三世笑

親者一世眼

才子去七尺

師教不_レ踏

親者_ハ親者

宝冠戴_ハ珠冠

佛公_ハ親者

須戴_ハ父母骨

師志三世笑
才子去七尺
親者一世眼

師教不_レ踏

親者_ハ親者

宝冠戴_ハ珠冠

佛公_ハ親者

須戴_ハ父母骨

師志三世笑

才子去七尺

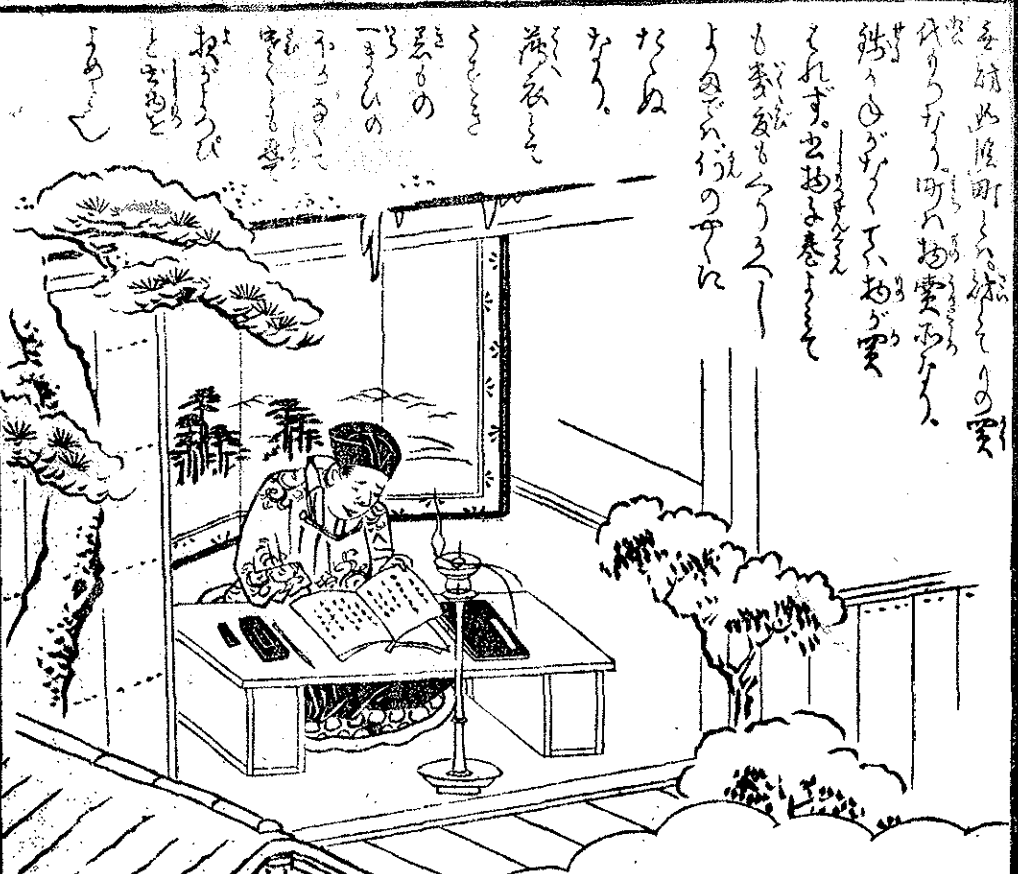
親者一世眼





朝早起て洗手
 抄之痛経巻
 夕更寝酒足
 朝寝楽義理
 名讀不入意

朝早起て洗手
 抄之痛経巻
 夕更寝酒足
 朝寝楽義理
 名讀不入意



如醉寐論語
 讀子卷不緩
 善材如修町
 為夜冬夜
 且更通夜
 今念其目

如醉寐論語
 讀子卷不緩
 善材如修町
 為夜冬夜
 且更通夜
 今念其目

玉瓶納白青
 朝早起洗手
 抄之痛経巻
 夕更寝酒足
 朝寝楽義理
 名讀不入意

如醉寐論語
 讀子卷不緩
 善材如修町
 為夜冬夜
 且更通夜
 今念其目



休務より入る
 文探海國家
 遂致碩學位
 綴應寒振荷
 此等人士皆
 登教好學又
 文探海國家
 遂致碩學位
 綴應寒振荷
 此等人士皆
 登教好學又



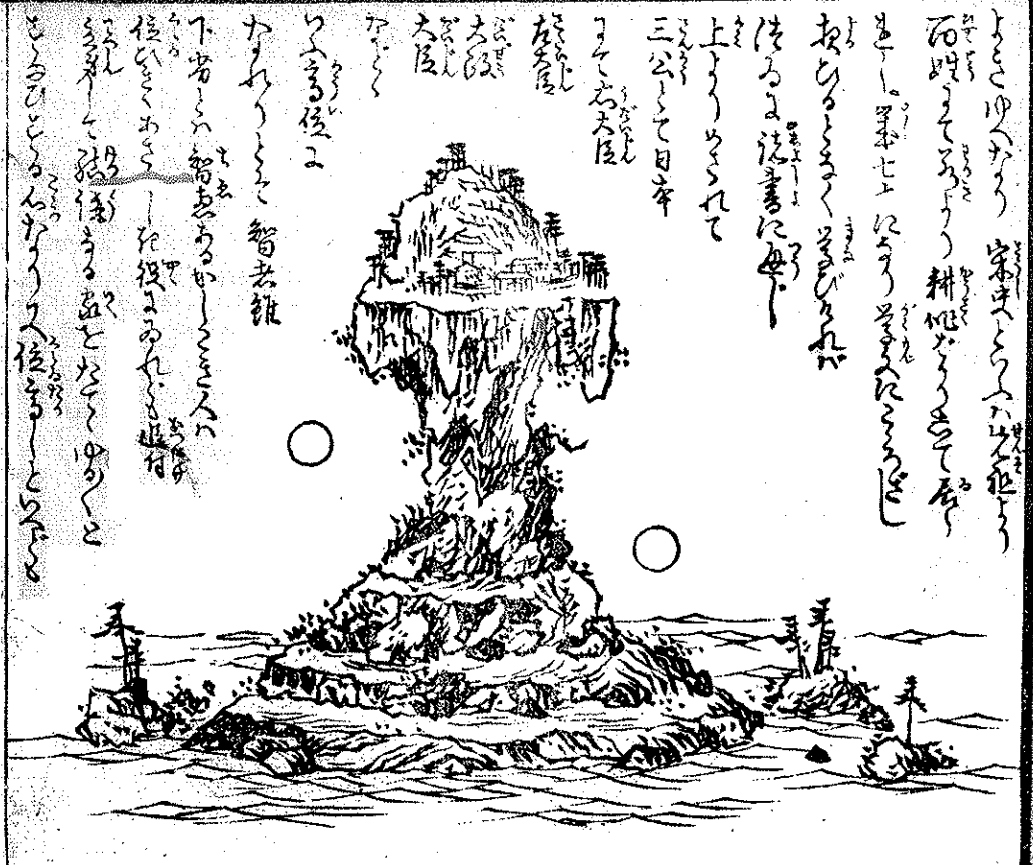
けさの人の匠樹よりくさぐさのくさぐさ
 文探海國家
 遂致碩學位
 綴應寒振荷
 此等人士皆
 登教好學又

腰帶文不松
 此等人士皆
 登教好學又
 文探海國家
 遂致碩學位
 綴應寒振荷
 此等人士皆
 登教好學又

松本... 伯英... 宋... 智... 大... 小...

大不陸地獄
 早至將士位
 好學坐師位
 坐言養之園
 陸志利之座

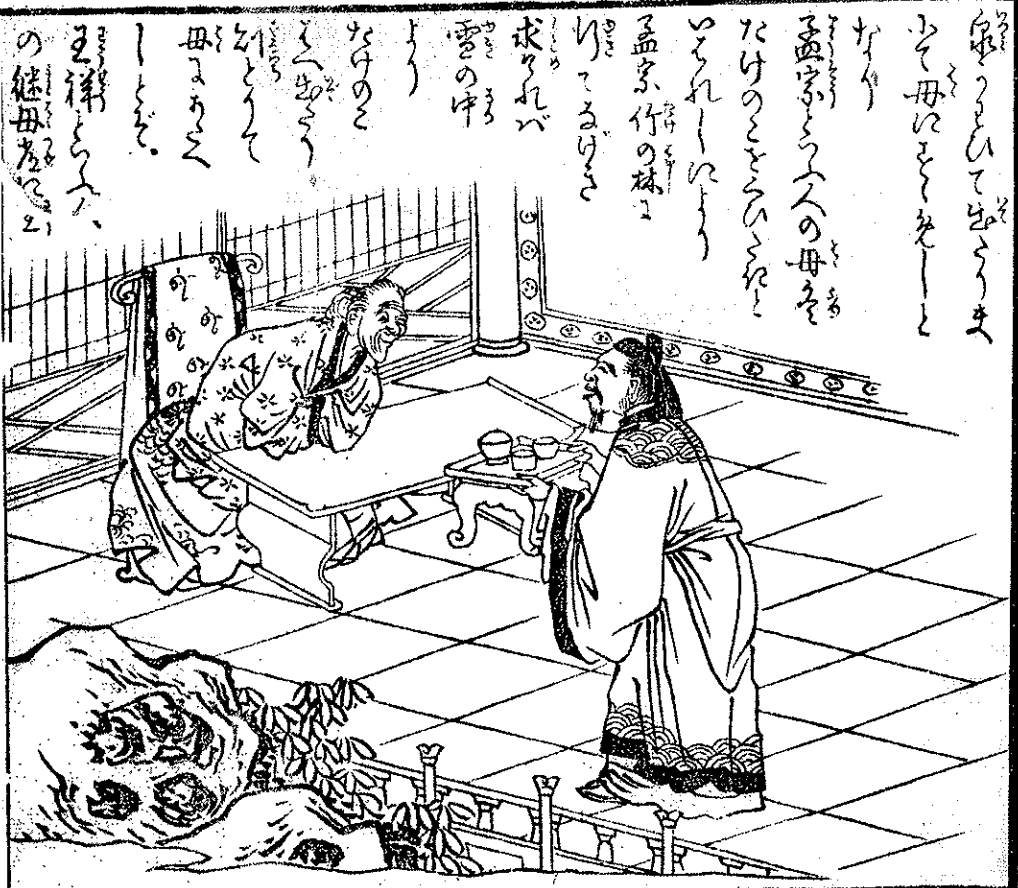
伯英九菜初
 宋吏七十初
 智者降下劣
 良志降下劣
 智者降下劣
 良志降下劣



小不陸地獄
 良志降下劣
 智者降下劣
 良志降下劣
 智者降下劣



美哉人母はて
 人母はて
 孝の
 母を
 井戸の
 どの
 河原
 川の
 け川
 あれ
 始
 つく
 両
 母
 鳥
 世
 世
 世



少
 子
 た
 母
 五
 の

及
 孟
 你
 王
 晏
 舜

身
 刑
 嗟
 董
 伯
 楊



極きの時、被るは...
 水はあつて、ひきまき...
 今々の川のこぼる...
 今、山の人...
 父を教習...

虎前鳴之客
 顔為裏負去
 為鳥来運埋
 許牧月仙墓
 松栢生化墓
 付吾人志皆



此目を...
 天のかげあり...
 親と...
 天のかげあり...
 親と...

父母致孝親
 仙神密憐愍
 不辱志如乾
 生死命之為
 早可傾涅槃
 煩惱身不淨



山の
 麓
 の
 村
 へ
 参
 詣
 する
 人
 の
 姿
 が
 見
 える
 山
 の
 頂
 上
 へ
 登
 る
 人
 の
 姿
 が
 見
 える
 山
 の
 麓
 の
 村
 へ
 参
 詣
 する
 人
 の
 姿
 が
 見
 える
 山
 の
 頂
 上
 へ
 登
 る
 人
 の
 姿
 が
 見
 える

迷下未差控
 黙可黙安安
 會志宜難若
 思可思六道
 生志不減悲
 壽命如蟻蟻



刑
 渠
 の
 人
 の
 老
 母
 と
 母
 の
 老
 母
 と
 母
 の
 老
 母
 と
 母
 の
 老
 母
 と
 母
 の
 老
 母
 と

胡生夕死矣
 身如芭蕉
 陸風易壞矣
 綾羅錦繡志
 全北真途行
 黄金珠玉志

とらふ、涅槃ふ松果と

ゆつとらふ、煩悩のやま

まことつとらふ、心

いかなん、中六境も

仏果さうら

念ふ者定、執着の

空なる、心なるを

空なる、心なるを

空なる、心なるを

天人修得、信老、善生

地獄げらつた、生老死滅悲

とらふ、あれたら、のの、あつた、あつた

ふつとらふ、煩悩のやま、あつた、あつた

い、く、明されて、夕に死と、色、香、の

あつた、秋風、あつた、あつた、あつた、あつた

あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた

あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた

あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた

あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた



只一世の實

業苑業羅志

文非佛道資

官位就職者

唯現世名守

致龜鶴之笑

露命不消程

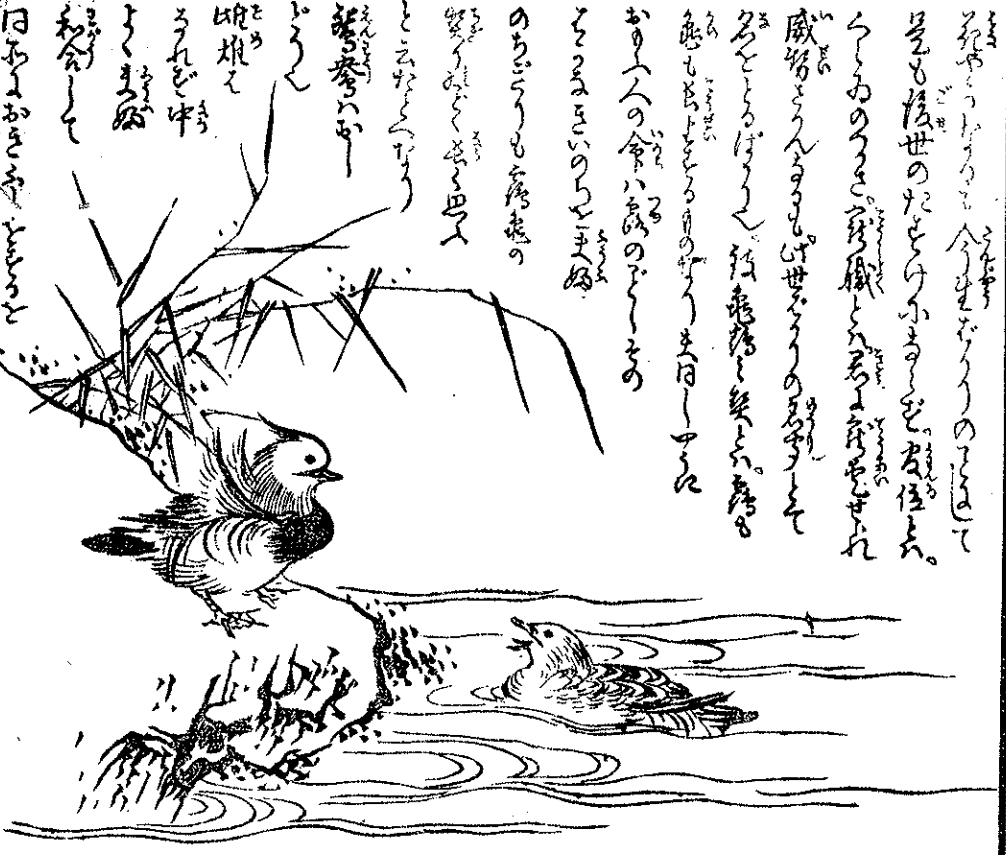
主死為之食

身伴不壞百

切利摩尼度

歎遷化之悲

大梵書卷圖



日蓮の法華の妙法蓮華經

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

あつた、あつた

寺者考之食らふる
 此の神のあるる
 切利唐の殿に
 三日月の金に
 なる様なりその
 まは遠化と
 三日月の金に
 なる様なりその
 まは遠化と

燃火血刀若
 無心持其者
 其賞於其命
 彼得控王使
 彼打獄卒杖
 布粒其挽粒

須達之十位
 阿育之七寶
 月支還月威
 龍帝投其力
 人志了仍施
 人不惜財



月支還月威の月支還月威
 月支還月威の月支還月威
 月支還月威の月支還月威
 月支還月威の月支還月威

財寶其提摩
 若人愛其才
 下布粒其幼
 見此布粒時
 可生法其心
 悲心持一人

布粒といふ人よ...
 後不たり...
 訪家の...
 一人...
 思ひて...



取砂...
 仁...
 三子...
 父...
 三子...



切煙... 為己... 袈裟... 卑研... 折花...
 一... 超... 半... 傳... 上...



柳屋一
 仙及と
 なるふーと
 後引及びく
 固る若衆のたね
 果の音
 秀の
 其のふん
 此れは梅とほ
 吾をこそれい
 梅をばるる
 初まこころへの
 たるよけきせよなと

中て報に悉
 下偏及六道
 共て成仏道
 為誘引幼童
 徑因果及理
 出内典外典



法く本ま
 あらハせり。
 まりバ
 けりり
 内典の二
 大の
 よく〜んを待たるとん
 くれも成仏の
 内典と仙との事やう。お興
 儒教のたふとつなう。ちひハ内教かお〜んつなう。

見志勿能待
 聞志不生笑
 童子教 終

此の書は、儒教の根本を説き、佛教の二教と
 比較して、その長短を論じて、儒教の優
 越を明かにする。其の論議は、極めて
 鋭く、且つ、平易である。

溪百年先生著

存經經典餘師

全一冊

此書の奥女子といふも師面ふくして後編かゝる人か為る改書が平がしを以て流るるをいふは文の傍よりいへる平がふくして注釈を如文理を多しき極ふるなり

法橋玉山畫

畫本實語教 全五冊

同 童子教 全五冊

鄙都言種 前編二冊 後編二冊

世書と世書といふ賢者聖人の教へありし事実にしるはの爲よきやまきやうに平がふくして國とまきかきりるるなり

文化九年壬申九月

今津屋辰三郎

浪華書林

河内屋惣兵衛

河内屋太助

合梓

安政四丁巳年閏五月下旬求之

太田永盛堂門人

佐藤鉄次郎世昌藏書

昭和五年八月、神戶市朝倉書店より
山本